なにが学生を夢中にさせるのか

―ファッションジャーナリスト・ピーコさんの講義から

金井啓子

「その人のこと、やっぱりまだ好きなの？好きの度合いもあると思うんだけど、あなた、本当に好きだったら、待ってることが楽しくならないとさ」

会場には、溜息とも感嘆ともつかないどよめきの声が広がった。

二〇〇九年十一月十八日の夕刻、ファッションジャーナリストのピーコさんが、近畿大学のキャンパスにやってきた。文芸学部の授業のひとつである「日本語文章養成講座」で特別講義を行う「ピーコ教授」として。

ピーコさんは、女性の身なりを「ファッションチェック」して辛口コメントを発する人物として、双子であるおすぎさんとの「おかまコンビ」のひとりとして、そしてまた、定期的にコンサートを開くシャンソン歌手として、幅広い世代に支持されている。

この日も、東京でフジテレビ「笑っていいとも」の生放送を終えた後、新幹線に飛び乗り、東大阪まで駆けつけてくれたのだった。翌日には大阪で毎日放送「ちちんぷいぷい」の生放送出演を果たして東京へ戻るというあわただしさの合間を縫って、この特別講義は実現した。

近畿大学の他の学生たちには申し訳ないことをしたが、今回の特別講義に関しては、ポスターを貼ったりせず、いわゆる公式な宣伝は一切行わなかった。もし行ってしまえば、ピーコさんの知名度から見てどれだけの学生が集まるのか想像できなかったし、「講演会ではなくて教室の講義がやってみたい」というピーコさんの意向に沿わない結果になるだろうと考えられ

たためだ。

結果的に、筆者が担当する「日本語文章養成講座」を受講する二十名弱の学生に加えて、その他の学生たちが筆者から口頭で聞き、その友人たちとともに集まり、教職員たちも加わって、受講者が計八十名程度という「ぜいたくな」特別講義が始まることになった。

筆者のごく短い教員生活におけるささやかな体験から見ると、講演会などを聞く時、学生たちは、席をできるだけ後列に取ろうとする。最後に質疑応答を行ってもよほど事前に用意させてでもおかない限り無言の行が続く。いい話が出たと思ってもメモを取らない。長丁場になるとつい居眠りをしてしまう。

しかし、今回の特別講義では、そのどれもが当てはまらなかった。それも一部の学生だけではなく、大多数の学生が「普段と違って」いたのだ。ピーコさんの知名度という要素を多少割り引いて考えるにせよ、興味のある話が聞けそうな時には最前列から座席が埋まってゆく、メモをとったピーコさんのコメントを後で書いた感想の中にきちんと再現する、それをもとに自ら質問をする、質疑応答を含めた九十分間ずっと居眠りせずに耳を傾けている。学生たちのこういった姿を見て、自身の日頃の授業を思い返し、大いに反省かつ今後の励みとした筆者の気持ちを付記しておきたい。

さて、特別講義のタイトルは『言葉を伝える大切さ』。事前に内容を少し知りたいという筆者の依頼に、ピーコさんは「私の周りには『他人の心がわからない』という不満をいう人がたくさん居ます。言葉だけで本当に他人に自分を伝えることが出来るのか?どうしたら自分の事が解って貰えるのか?を考えましょう」というメモを寄せてくれていた。

講義は、橋下徹大阪府知事が府職員との間に起こした、いわゆる「メール事件」から始まった。和歌山県の紀の川大堰からの利水撤退で大阪府の負担が巨額にのぼることに関して、知事が職員たちにメールを送り、それに対する職員のメール返信が「不適切」だったために処分が下された、という一件である。

ピーコさんは、まず筆者にこの件に関する感想を発言させた。「職員が書いたメールは最初からけんか腰だったから、言いたいメッセージが伝わる前に橋下知事は怒ってしまった。ものを伝える時は、きちんと礼を尽くして書くものなのではないかと感じた」と筆者が答えると、ピーコさんは、今回の一連のやりとりを見ていて、「ものを伝えるということに関して、何か間違ってそうな気が」したことを明らかにした。送り手と受け手の間に認識の差が生じているということだろうか。

六十代半ばのピーコさんは、「若いお友達がいて、その若いお友達とどうしても連絡取りたいのに、いつでも電話に出ないという状況が長く続きましたから、何をしたらいいのか、そしたらやっぱりメールを打つことだというので、メールを打つこ

とに」したのだという。

メールに関して、ピーコさんは次のような考えを持っている。

「わたし、メールっていうのは、ちゃんとした文章を書くもんじゃないと思ってるのね。メールって、ちゃんとした、拝啓なんとかかんとかで、そうでございますねみたいに書いたりすると、とても他人行儀みたいな気がする。やっぱりメールって変に他人行儀に書くと、心が伝わらないみたいな時ってあるでしょ」

講義後に寄せられた感想の中に、「(パソコンの)メールでも、手紙よりは普段以上に手軽な気持ちで記述できる。携帯メールは、それ以上に気持ちがストレートに表れる。メールは気軽に記述できるが、声に出した言葉よりも後に残り、本のように読み手の想像力を必要とする。だからこそ、携帯メールの言葉は大切にする必要があると感じた。新しいコミュニケーションの手段に対する『文法』が必要なのかも知れない」(教員)という言葉があった。

ピーコさんの現時点での「文法」は、「メールっていうのは、とても個人的なものでね、公に使っちゃいけないものだと私は思ってるわけ。それを仕事で使ってね、ひどい書き方だから謝れという考え方が私はとてもまずいと思っているのね」という考えに基づいているらしい。

辛口のコメントで知られる人であるだけに、メールでは特に礼儀を重んじる必要を感じないという発言は、やや意外感もあるかも知れない。いや、むしろ幅広い世代の感覚を吸収できるこの柔軟性があるからこそ、中高年女性から中高生まで多くの人たちから愛されるのだろうか。

ただし、若者たちの語彙の少なさに対しては辛辣だ。

最近のテレビ番組などで、料理についてコメントする場面があると、「おいしいとか言う前に、肉を食べると『やわらかい』っていうのね、若い女の子は。必ずやわらかいって言うの。肉って、やわらかい肉だけがおいしいわけじゃないのね。かたくてもおいしい肉があるわけですよ」と批判する。

余談になるが、確かに日本人はやわらかい肉を愛している。牛肉といえば、とろけそうな霜降り肉の人気が高い。牛にビールを飲ませて霜降りの部分を増やすという話も聞く。筆者が二〇〇九年夏にニューヨークを訪れた際、百年以上続き予約がなかなか取れないという人気のステーキ店に連れて行ってもらったが、大きな皿からはみだしそうな大きな肉のかたまりを、それも歯ごたえ十分のものを、まわりの人たちとともにほおばった。確かに噛み切るのは時間がかかる固さがあったが、噛めば噛むほど出てくる風味があり、おいしいと感じた。しかし、インターネットなどで店の評判を読むと、特に日本人の中では評価が真っぷたつに割れているらしい。「このレストランの肉は霜降りではなく固くていまひとつ」という声と、「いか

にもステーキらしいステーキでおいしい」という声に。

肉を「やわらかい」としか評せない語彙の貧弱さは、随所に見られると、ピーコさんは指摘する。「やばい、これはやばい味だよ、とか言ったりするのね。なんか間違ってそうな気がするんです、若い人達。それでいて、友達に自分の心が通じないとかいう人がとても多いんですね。やばいなんて一言言っただけじゃ、なんだか通じないよね。やばい味なんていうのは、私なんかからすると、あなたどんな味ですか、あなたの舌はどういう舌ですか、出してごらんなさい、っていうふうに考えちゃうんです」と語る。

文芸学部二年生の女子学生は受講後に提出した感想の中で、授業で作文を書くたびに語彙の少なさを痛感していると告白した。やや長い文章だが、あえて引用する。

「なにかひとつやふたつ難しい言葉を知っていても、全体の文のレベルが低いと、なんだか無理やり背伸びしている印象を自分の文から受けてしまって、毎回いやになってしまいます。ただでさえ下手な文なのに。そうやって自分ですら読み返すのを避けてしまうのを他人に見せるのは、より一層忍びないものがあり、そういう遠慮みたいなものが要するに『相手に自分の心を見せない』ということなのだと思います。相手に自分の心を見せて近づいていくのには、自分の書いた文章（思うこと）をヘタクソでもいいから相手に見せて、また上手になっていくように努力を惜しまない（語彙を増やすとか）必要があるんだろうなあと思いました。難しいですね。一生かけてやっていくんでしょうね」

ピーコさんは、このようなはたち前後の学生たちの前に立って、自分自身の語彙が少なかった時代、つまり、自分自身について十分に語れなかった時代を思い出しのだろうか、こんな話が出てきた。「私はね、すごくいま悔やんでることがあるのね。父親や母親に、私はゲイですよって宣言したことがないんです。男の（双子の）両方ともホモの子どもを持った母親って、どういう気持ちだった、って死ぬ前にちゃんと聞いとけばよかったと思う」のだという。

そうしておけば、同性愛の息子や娘を持つ母親たちから、いまピーコさんのところに寄せられる相談に対して、自分自身の母親の話を引用してなにかアドバイスができたのではないか、と感じているからなのだ。

「私みたいな人でも自分のことをちゃんと言ってなくて、ずっとこのまま思い悩んで死ぬまでそれを持っていかなきゃいけない。自分の言葉で自分のことをどのくらい話せるか、っていうのを一回考えてみてください」と学生たちに呼びかけた。

ピーコさんは実際に学生たちが座る席までマイクを持って行き、一言での自己紹介を数人にやらせてみたが、ある学生は言葉足らずになり、また、ある学生は一言も発することができ

なかった。自分を語る難しさを実感した学生たちに向かって、ピーコさんは「自分の中の、少し人に知って欲しい一番いいところ、じゃなければ、悪いところ、ちょっと魅力のある悪いところっていうのを、上手にいつも自分の言葉で言えるように、最低自分のことはできるようにしていると、相手が自分のことをわかってくれないとか、友達ができないとかっていうのは、少しずつ解消されていく」と語った。

自分のことをうまく表現するためには言葉を多く知っていたほうがよいと考えるピーコさんは、そのためには読書が効果的な方法のひとつという持論を展開したが、「授業以外では全く本を読まない」という一部の学生たちからは「読みたい本が見つからない」「字を読むのが面倒くさい」「高校の授業で受験用に読んでいた文章は訳がわからなかった」といった理由が挙がった。

「本を持ってないと、活字中毒なので落ち着かず、いつでも本を二、三冊入れて大きな荷物を持っている」というピーコさん。自身の大きなバッグの中から東直己著の小説を取り出し、冒頭の五行を朗読してみせた。

朗読を終えたピーコさんは「どうして本、文章っていうのが面白いかっていうと、本を読むということは、いま言った（読んだ）ことって、私がこのことを想像するのと、みんながそれぞれ想像するのは違う」からなのだと説明した。ただ文字を追うのではなく、行間をふくらませて、今まで見たり聞いたりしたことがない何かを想像することが楽しいのだという。

「まだあなたたちの人生は二十年ぐらいで、その中だって、書いてあることで、行間をふくらませることは出来ると思うのね。本を読んでると、同じことなのに、いっぱい表現のしかたがあるって思うんです」と語った。

その他にも、おいしそうな料理がいきいきと描写されているという高田郁著の時代小説『八朔の雪』や、オスカー・ワイルドの童話『幸せな王子』などを挙げ、まずは何か関心を持てる本を探してみるよう勧めたピーコさんは、自身が長年歌い続けているシャンソンにも「語彙を増やす」秘訣が潜んでいるのではないかと話した。

「日本のポピュラーな歌の中にはあんまりない、哲学的なもの、なぜ生きてるんだろう、ということなんかを歌っている歌があるし、恋人に死なれちゃったっていう歌もありますし、なぜか年とったお母さんと亀を飼ってるホモの人の歌もありますし、それから、もうあと先がない、年をとってどうやって生きていこうかっていう歌もあるのね」とシャンソンを勧める理由も明らかにした。

「本を読んだり、クラシックを聞いたり、シャンソンの内容を聞いたりすると、そこにこれから先自分がもしかして挫折した時に、それを乗り越えるヒントがある言葉があったりするか

と私は思う」のだという。

ラジオなどで聴取者からの身の上相談を受け付ける場面もあるというピーコさん。下は十代から上は五十代まで、「私のことが向こうへ伝わってないとか、友達がなかなかできないとか、相手が自分のことをわかってくれないとか、そういうことがとても多い」という。

ピーコさんはそれについて、語らなくてもわかりあえているという誤解、語ろうとしても伝える言葉の種類が少なすぎること、そして相手に対して自らを素直に開こうとする勇気がないことを、要因として挙げた。

東京で出会った若い男性三人組は、いつも一緒にいるが、携帯電話などを見ていて話をほとんどしていなかった。「なんでしゃべらないのって聞いたらね、ずっと一緒だからわかるんだって言うの。そういうことはありえないの、ばかじゃないの、って言ったの。サイコキネシス（念力）とかそういうものを持ってるとか、エスパーだったりするかじゃなければ、相手の心なんか読めないでしょう」と舌鋒は鋭い。

このようにわかりあえていると「誤解」している若者たちもいるが、自分のことがわかってもらえていないと訴える人たちが多いと、ピーコさんは指摘する。

「誰かにわかって欲しいとかっていうことはなかなか無理なんですよ。それはね、欲なの。よく、友達なのにわかってくれないとかって言うでしょ。親なのにわかってくれないとか、恋人がいたりすると、彼は私のことをわかってくれないとか、彼女はわかってくれない（と言う）。わかってなんかくれるわけないのに、人のことなんて」

ピーコさんは、双子であるおすぎさんと定期的に仕事で顔を合わせ、週一回は今でも食事を共にするそうだが、それでも「全くわからないことってあるの」だという。

「わかりたいとか、どうしてわからないんですかっていうことは、当たり前なんです」

ただ、このような悩みに対する特効薬がないわけではないらしい。

「じゃあ何をしたら相手がわかってくれるかっていうとね、簡単なことなの。自分の心のほうを先に開かなければ、相手なんて入ってこないんですよ」と学生たちに語りかけた。

「自分は自分だけで生きているんだ」と「自分のことだけを考え」他人にあまり心を開かずに生きてきたピーコさんが「心を開く」大きな転機となったのは、二十年ほど前に癌のために眼球を摘出する手術を受けたことだった。義眼には多額の費用がかかることがわかった時、芸能界の知人たちが「一口一万円」の寄付を呼びかけてくれた。三百人もの人が趣旨に賛同して寄付をしてくれた名簿を目にすることになった。

「人間ね、死ぬっていうのを見ると、人生変わるんですね。あ、死ぬんだというのがそばに来ると、がらっと変わる。私、その名簿を見て、そうだ、私は私ひとりで生きてるんじゃない、ってことを二十年前にわかったんですね」

それがわかった時に、これから仕事を引き受ける際には「自分のため、自分の利益のためになるっていう仕事の順位というか、優先順位を一番に置かないことにした」のだという。その結果、ピーコさんに訪れたのは驚くような変化だったらしい。

「自分のためっていうことじゃないことを優先するとね、欲がなくなるんですね。欲っていうのが、自分を素直に出せる出せない壁になっているのね。いい人に見られたいとか、頭がよく見られたいとか、すてきに見られたいとか、そういうふうに誰かにどういうふうに見られるかとか、どう思われるかということを優先するのが欲だと思うんです。私ね、二十年前にそれをやめちゃったんですね。もうまるまる裸の自分でいいやって思った。そうしたら何が変わったかっていうと、自分でも驚くんですけど、優しくなったんですね。何がすごく楽になったかというとね、なんにも言わなくても、心開いているだけで、相手の人がとても納得してくれるようになった。きっとね、みんなが今ね、なかなか自分のことわかってもらえないとか、大事な人にも心が通じないとかっていうのは、きっと何かまだ自分が素直で裸になってないからだと思う」

こういったピーコさんの言葉を、学生たちはどう聞いたのだろうか。

四年生の女子学生からは「自分自身が伝え、発する言葉を過信しすぎていたのだと気がつき、驚いた。『伝わらない』と嘆き、その理由が相手にあると勘違いしていては、伝わるものも伝わらない。『考えの押し売り』これが私の得意分野だったのか、と今さらながら知った」という感想が寄せられた。

また二年生の女子学生は「ピーコさんの話を聞いて、相手を信じるということは、素直な心で相手と接することであり、その行為が『心を開く』ということではないかと思った。相手に対する先入観、疑いなどを取っ払って、まっさらな気持ちで話す。そうすることで相手の話す言葉も相手の行為もすんなり受け止めることができるのだと思う」と書いた。

一時間以上話し続けた後に、自らマイクを持って客席の中を歩き回り質疑応答を行うピーコさん。

まっさきに一年生の男子学生から出た「芸能界の裏話が知りたい」という要望には、その日の「笑っていいとも」の舞台裏を話してみせるサービス精神を発揮した。

また、同性愛の男性の中に、女装をしたり、性転換手術を受ける人がいる一方で、ピーコさんのようにそのままの人もいる、その違いについて尋ねた一年生の女子学生に対しては、「ただ性の対象が同性であるだけで、大学教授の人もいるし、

泥棒もいるのよ。みんな、ストレート、ヘテロの人たちと構成は同じなのよ。だから、いい人もいるし、悪い人もいるし。性の対象だけに男の人を好きな人もいるし、頭の中だけで同性に対する思いを文章にしてたりする人もいるし、だから、分けられない。普通の人と同じと思ってくれていい」と答え、同性愛者の服装も行動も性の好みも、異性愛者と同様に、個性のひとつに過ぎないという考えをはっきりと披露した。ただし、最後に「お友達にゲイの人がいたら、特別に、あなたはどういうゲイなの、なんて言わないほうが賢い女よ」と釘を刺すのを忘れない姿に、「優しさと強さと繊細さを感じた」（職員）との感想が寄せられた。

テレビで見るピーコさんとのイメージのギャップに驚きを示す学生も多かった。「厳しく」「おもしろく」「いつも人の悪口を言っている」人物というイメージを抱えて特別講義に臨んだ彼らは、「優しく」「心が非常に温かい」人という百八十度変わった印象を抱えて受講を終えたようだ。二年生の女子学生は「ピーコさんの魅力にひかれていき、すいこまれていった。『心を開きなさい。そうすれば相手も開いてくれるようになるから』私がピーコさんにすいこまれた理由もここにあると思う」と感想の中で語った。

筆者が在籍する文芸学部英語多文化コミュニケーション学科には、マスメディアに対する関心が強い学生も少なくない。マスメディアを通じて伝えられるイメージと現実の姿のこうしたギャップに、なにかを感じとった学生もいたのではないだろうか。

この稿の冒頭に掲げた「本当に好きだったら」という言葉は、一年生の女子学生からの質問に対するピーコさんの答えである。交際相手の男性との待ち合わせに二時間も待たされて喧嘩をした、男性は友人と酒を飲んだ後に眠ってしまったためだった、自分としてはもう許したいがどのような言葉を伝えたらよいのか、という内容だった。全体的に反応がよかったこの特別講義の中でも、特に学生たちの反応が目立った瞬間だった。

表題にも示したが、ピーコさんの「なにが学生を夢中にさせ」たのだろうか。最後に少し振り返ってみたい。大きな要素は、（一）自分の経験をかなりはっきりと語る率直さ、（二）講義の相手である学生たちに自分の心を開いてみせる大胆さ、（三）自分の主張を保ちつつも相手に合わせる柔軟さ、（四）話の随所にちりばめられている具体例、という点ではないだろうか。

学生たちにとって、同性愛者であり癌の闘病経験を持つ人の話を聞く機会はかなり稀なはずで、大きな刺激を受けただろう。その一方で、そういったいわゆる「社会的弱者」に対する

見方も多少なりとも変わったのではないだろうか。また、「自分をわかってもらうにはまず自分から心を開く」という、今回の中心テーマとも言える行為をピーコさん自らがやってみせ、説得力が大いに高まったことは間違いない。ピーコさんの柔軟性は、学生たちにとってなじみが深いメールの話を冒頭に持ってきた点に垣間見え、マイクを持って対話を楽しみながら講義を進める姿など、さまざまな場面で表れていた。そういえば、中高年女性が客席のほとんどを占めたピーコさんのディナーショーを筆者も見せてもらったことがあるが、ピーコさんの話題は彼女たちにぴったり照準を合わせた内容だったことを思い出す。そして、若者に「本を読みなさい」と紋切り型で迫るのではなく、ピーコさん自身がどれだけ面白い読書体験を味わっているのかを具体的に語ることによって、「読んだら楽しいことがあるのでは」と学生たちに感じさせる姿は、筆者の今後にとって貴重な参考資料ともなったのである。

これまで大学での講義はほとんど行ったことがなかったというピーコさんは、冒頭に「こんなに若い人たちの前でお話しすることが、だいたいありません。私の講演会なんかは全ておばさんで、若い人が前にいるってだけで、ちょっとこう。だいたい男の人がいないのよ、私の講演会なんかは。もう男の人がいるってだけで気持ち悪くなる。だからちょっと今日は普段と違うんですけど」などと語っていた。だからかどうか、講義を終えた後にピーコさんに尋ねると、この日は随分緊張していたらしい。

質疑応答の際には「もう二度と来ないですよ」と冗談交じりに質問を促す場面もあった。しかし、講義の最後に「きょう、ここに来てよかったなと思ってくれた人?」と尋ねられた学生たちが迷わず手を挙げたのを見て、「じゃあまたなんかあったら来よう」という一言まで出た。

実際に、緊張が解けた後の食事会で、ピーコさんは筆者に大変楽しかったと語り、「今度は講義じゃなくて『ピーコの人生相談コーナー』にしようよ。ただし、事前質問は受け付けないのよ。その場でみんなの前で質問できる人だけ相談できるの」という新たなアイディアまで出てきた。このアイディアを実現させられるだろうか。今回の特別講義も、話が出た当初は「絶対無理。ありえない」と思い込んでいた筆者だが、身体を動かし始めたら企画が動き始めた。何事も不可能ではないのだろう。

しかしながら、ピーコさん、そして「オフィスおすぎとピーコ」事務所の支えなしには実現しなかったことは間違いない。大いなる感謝を示して、この稿を終えたい。（了）